

# 北イタリア小紀行

2015年12月5日～11日

大村 恵美子

80歳を数年も越している私は、主宰者・指揮者の任務を降りるタイミングを見定める時期に来ている。第5回目の海外巡演を2009年夏に終え、今夏は南相馬公演に全力をつくした。個人的な国内旅行もいくつか経て、今回思い立ったイタリア観光旅行は、私の体力がどれだけ残っているかのテストケースだった。合唱団のスケジュールに影響の少ない1週間、いちばん安価で社会的危険度の少なそうな国を選んだつもりが、往復のトランジットがトルコ航空のイスタンブールとわかり、10月申し込み時には想像しなかったが、最近シリア・トルコ・ロシアのトラブル発生地域となってしまった。さいわい、つつがなく終わり、むしろ思いがけなくトルコの初体験となったのもありがたかった。

イタリアに関しては、1960年代の留学時代から3回訪れていて、ひいきに思っている国だ。今回予定の7か所（ミラノ、ヴェローナ、ヴェネツィア、フィレンツェ、サンマリノ共和国、ヴァチカン、ローマ）のうち、ヴェローナ、サンマリノ2か所だけが初めてだった。

往復航空機のほかは、移動はすべてチャーターバスで、ツアー応募17人、添乗員1人、計18人なので、バス内はいつもゆったりしていた。

7日間を終えた結果は、パーフェクトといえよう。皆様ありがとうございます！

## ① 12月5日（土）出発、イスタンブール

荻窪教会での合唱練習を半分で早退して、白井さんにJR荻窪駅まで車でお送りいただき、新宿西口17:00発のリムジンバスで成田空港へ。いちばん遠い最先端の47ゲートから、22:25発のトルコ航空でイスタンブールに向かう。機内食の香りや味付けになじめないで、消化薬に助けられる。

17人の同行メンバーのうち夫婦が4組、そして女性添乗員のKさん。機内のサービスは、男女ともゆきとどき、みんな簡単なやりとりは日本語、アナウンスはトルコ語・英語。約13時間後、トランジットのイスタンブールに、現地時間04:20着。空港内の賑わうマーケットで休息とショッピング、3時間ほど。私は、使い残しのユーロ紙幣と硬貨を姉からもらっていたが、新鮮みかんのカップ入りを見つけて、これでユーロ硬貨はみんな使い切る。少し足りないけれどおまけですと。店の人々、ゆきかう旅客、大声を出す人はなく、子連れもみんなおちついて静か。

## ② 12月6日（日）ミラノ、ヴェローナ

日・土・伊、この辺で時差調整。イスタンブール08:00発、ミラノ10:00着（時差マイナス1時間で所要時間3時間）。朝のあかるい機内で、オムレツ、サラダ、ヨーグルトの朝食。昨夜着陸前に窓からのぞいたイスタンブールの夜景は、大がかりな「千夜一夜」的なきらびやかさに見えたが、ヨーロッパの最初に着いたミラノは、空もどんより曇り、廊下の両側の広告は、無機質で不機嫌な白人男女の表情。

お迎えのバスで市内に入り、レストランで昼食。ミラノ風カツレツ、卵リゾット、赤ワイン。イタリアではあまりビールは飲まれないとのこと。市内を徒歩見物。ミラノ大聖堂【写真】周囲、レオナルド・ダ・ヴィンチ像、スカラ座、ヴィットリオ・エマヌエーレ2世ガレリア（アーケード）等。ここミラノでは、町の守護聖人アンブロジウスの聖日（12月7日）からクリスマス商戦が始まるのだそうで、日曜日の今日（6日）が、その繰り上げの初日になっているらしい。乳母車や幼児連れも多いが、大声で叱ったり泣かせたりする大人もなく、おちついている。市内一面のクリスマス・デコレーションはさすがだが、古典的で、節度があり、人を驚かすような、奇抜なものはない。

因みに、古くからのローマカトリック聖歌のなかで重きをなすアンブロジウス聖歌は、このミラノのアンブロジウス（4世紀のミラノ司教）に帰せられていて、今わたしたちが練習しているBWV16《主ほめ歌わん》の原曲「テ・デウム（われら主なる汝をほめ歌わん）」や、前々回の定期演奏会で上演したBWV62《いざ来たりませ 世の救い主》の原曲も彼の作とされていて（いずれもバッハのテキストはルターによるドイツ語訳）、私たちにも縁の深い聖人である。

今日は、ミラノをチャーターバスに乗って去ると、日中にヴェローナを経て、ヴェネツィアまで走り、その入口の町メストレのホテルに宿泊となる。ミラノもヴェローナもそれぞれ魅力的な、歴史も古い都市なのだが、1泊ずつし





ていたのでは7日後に帰国できない。ヴェローナのイタリア人女性ガイドさんも、しきりに「次はヴェローナだけで1週間滞在できるように来てください」と言っていた。もっともなことだ。人口25万の中都市だが、ここもクリスマス商戦初日とあって、5時ごろの夕暮れからは、狭い道路までも一様に家族連れで溢れかえる。デコレーションも、ミラノより庶民向きで素朴だが、ひしめくように並ぶ小店のこまごました商品を買いたくても、人の流れに抗して店に近づくのは難しい。この人混みの中でも、私たちのヴェローナ在住のガイドさんは、日本語で、抜群のサービスぶり。群衆の中を泳ぐようにして、遠近の遺跡をみごとに紹介された。とりわけ『ロメオとジュリエット』のモデルとなったジュリエッタの家のバルコニーは、ジュリエッタ像をさわらせたり【写真・左】、要所でカメラのシャッターを何人分も引きうけたり、舌を巻くほどの積極ぶり（プリマ！）。振り切るようにしてバスにもどり、115キロ先の宿泊ホテル・アントニー（4つ星）まで辿りつく。他に2、3のグループもあったが、夕食にはツナ・パンネ、ひらめフライ、白ワイン。部屋に入って、やっと何十時間ぶりに体を横たえられた。

### ③ 12月7日（月）ヴェネツィア

今日は日中ヴェネツィアに滞在、夜フィレンツェ郊外のカレンツァーノまで走らせて（248キロ）、ホテル・デルタ・フローレンス（4つ星）に宿泊の行程。

朝06:30、ヴァイキング風の簡単な朝食のあと、07:30、バスでホテル出発。寒くはないが、曇天の中を、小さいモーターボートで、ヴェネツィアのサンマルコ港へ。広場にあるグラス工房見学。職人さんのデモンストレーションを見ているうちに、細長い口のついた瓶が出来あがる。原色のあざやかな食器や杯など、美しいが、値段も高いので即座に買う人は少ない。サンマルコ大聖堂【写真・右】の内に、観光客が列をなして入る。独・仏のドームに比べて、もっ



と古い様式が残り、パレストリーナ等の対位法音楽の最盛期、何階建てにもしつらえられた聖歌隊席から、何重にも鳴りひびく合唱・オーケストラがこだまして会堂を蔽いつくした当時のステレオ効果をしのばせる。

そこからアルノー川沿いにリアルト橋まで歩き、工事中の現状を確認、12人のゴンドラ組本隊と、私たち5人の自由行動組（大村2人と日本舞踊の3人女性）とわかる。地図や絵はがき、おみやげ品などを買いながら、レストランでピザ、スパゲッティ、サラダ、コーヒーの昼食。17人のメンバーと、話し合う間がほとんどないほど過密なスケジュールで、今やっと自由行動を選んだ者だけ、識り合うことができた。3人とも、12月26日の荻窪コンサートにいらっしゃるとのこと。待ち合わせ時間に、波止場でゴンドラ組を迎え、全員でまたバスで昨夜からのホテルまで帰って、19:00、夕食。柔かくワインで煮込んだ牛肉とフライドポテト。ホテルの近くに、スーパー「カルフル」があって、値段が安いというので、希望者はそこにショッピングに行く。早朝からバス、モーター船、徒歩で市内の広場や小径を歩きまわり、またバスで帰館と、動きの多い一日だったのに、夜までスーパーにショッピングとは、寝るまで前向きのヴェテラン旅行者方である。

### ④ 12月8日（火）フィレンツェ

カトリックでは、この日は「無原罪の聖母マリアの祝日」（マリア受胎の記念日）で、休日になっている。夜は同じホテル泊なので、荷物は部屋においたままで気軽だ。フィレンツェで盛りだくさんの一日なので、早朝8時に出発。ミケランジェロ広場の高台からフィレンツェ市全景を見下ろし【写真・次ページ上】、バスで入ってゆく。休日なので子供や家族連れが多く、外国人は減って、クリスマスに向かい観光客はふえてゆくそうだ。私は、フィレンツェ住民たちと交われるのが楽しみだ。観光ガイドは地域の人をたのむのが義務づけられていて、男女入れ替わりに区切って現



れるイタリア人方は、短期間の養成だといわれるにもかかわらず、日本語がよく話せて、分かりやすい。地域在住の日本人ガイドも何人かいらしたが、担当の町をとっても愛して伝えたがる気持ちがよくわかる。

さて、市内中心の花の聖母ドームは、人があまりに多く、ミサの時間にも制約されるので、内部見学はあきらめて外回りを見るだけ。あいにく休日にあたったので、仕方がない。その周囲の世界遺産地区を歩き、ついでウフィッツィ美術館を見学。ここは現地在住のヴェテラン日本女性ガイドによる、イヤホン案内で、とても要領よく、2時間くらいで一巡できた。

ここからは、オプションでピサ斜塔観光となるが、私たち2人だけ、自由行動にさせてもらい、かねてからもう1度、と念願しつつづけていた、サンマルコ美術館（修道院）【写真・下】のフラ・アンジェリコの壁画再訪を果たした。イタリア語の大柄な図鑑と、日本語のパンフレットもあったので、これからチラシや月報カットなどに利用しようと買っておいた。どぎついルネサンス美術が多い中に、このフラ・アンジェリコはととてもすがすがしく、人間の善意を思わせてくれる。この美術館の運営も、現住の修道士たちによっているという。予測なしに訪ねたのに開館していて好運だった。



その後アルノー川沿いにヴェッキオ橋まで戻ってみると、以前はいろいろなものを売っていたのに、いまは両側とも宝石店ばかり。それでも押すな押すなの人ばかり。乳母車の子連れも多いが、ヴェローナの夕宵の混雑ぶりと同様、陰悪な風はなく、みんなで楽しんでる感じだ。

本隊との待ち合わせ時刻までの時間稼ぎに、橋のたもとのカフェに入って休む。窓から見える狭い道路に、赤いサンタクロース衣装の大群が通り、商業の出初め式らしい。これは人目をひいたようで、夜のテレビニュースにも映っていた。

18:30、チャーターバスが現れて、一同と合流し、フィレンツェ郊外カレンツァーノのホテルに近いレストランで、ラザーニャ等の夕食。久しぶりに早目の帰館で、大きなバスタブの入浴、就寝。

## ⑤ 12月9日（水）サンマリノ

フィレンツェは昨日1日で早くも終わり、今日はサンマリノ共和国 → ローマ入りの移動日。昔、通りがかりに高い塔をはるかに見上げてゆくだけだった、サンマリノの初訪問となる。

08:15 ホテル発、バスで230キロ、サンマリノ共和国（海拔780メートル）に到着。いちどヴェネツィアからアッシジに行く途中、アドリア海沿いに南下して、リミニで泊まったことがある。街道からはるかに、サンマリノ共和国の砦が高々とそびえ立っていて、あんな所に、いつか訪問することがあるだろうか、半ば諦めながら仰いだ。それが今日、叶えられるのだ。独立国だが、軍隊はあるのだろうかときいたら、イタリア軍が警備にあたるのだそうだ。（2009年の第5回ヨーロッパ巡演に参加した方々は、あの時訪れたローテンブルクの、やや大規模な感じとイメージされたい。）

正午近くに城門をくぐり、バスは極限まで登ったところで私たちを降ろしてくれたものの、街中心の自由広場までは、まだまだ一本道を登りつめねばならない。見当がつかず、私は足に自信がないので、バス駐車場から最初のサンフランチェスコ門の傍らの、昼食を予約してあるレストランで皆さんをお待ちすることにした。自分のゆっくりペースで、少し登り坂を進み、郵便局で、この国全体の景色が1枚になった切手を、絵はがき代わりに買う。レストランの対面に、馬小屋のつくりがあり、イエスの誕生直前の風景が展開している。天使、羊飼い、3人の博士、馬小屋の馬、牛、羊、そしてマリアとヨセフの前の地べたに、からっぽのわらの寝台【写真・次ページ】。25日になるまで、嬰兒（みどりご）イエスはまだ置かれない。このつくりは、カトリック教会では世界的にみられる習慣だ。（帰国後、2人の知



人の家庭で、12月7日と9日にそれぞれ赤ちゃんが生まれたと聞き、イエスはまだ生まれていなかったのを見てきたのに、今年の2人の赤ちゃんたちは、イエスより先に生まれたのね、と笑った。) その馬小屋のうしろに、Museo della Tortura (拷問具博物館?) という建物がある。ヨーロッパの市庁舎の地下によくあるものだが、恐ろしそうで1度ものぞいたことがなかった。今、時間つぶしに入って見る。人間は、同類を罰するのに、どうしてこうも残忍になれるものか。今もって各地でひどい刑罰が残っており、そんな国を旅する気になれない。

さて、全員そろったところで、とり肉とスパゲッティ、サラダの昼食。これまで最高の味の良さ。みんな満足して、この小さな国とお別れする。今夜宿泊するローマまで、317キロ。サーヴィスエリアで見ると、移動のはげしい休日の時期なので、警察その他の警備が目立っている。

ローマに着き、19:45 ごろホテル (ローマ・ヴィンテージ、4つ星) に入って、おそい夕食。現代風にややけばけばしい造り、従業員も無愛想。首都となるとこんなものか。パリでも、はじめは取りつく島もない感じだが、知り合えばすぐにフレンドリーになる。食後はすぐに解散、就寝。私は浴室の水がいつまでも冷たいので、足だけ洗って寝たが、他の方々は、水風呂と知らずに入りかけた方もあったとか。一帯の水道の管が破裂したせいだとか、ホテルの罪ではないということらしい。

## ⑥ 12月10日(木) ヴァチカン、ローマ

いよいよイタリア最後の日。もう夜にはトルコ航空の機中泊となる。往路と同じルートで、イスタンブール経由、11日19:55には成田着である。地図を見ると、成田からソウル、ペキン、ウランバートル、アンカラと、ほぼ真横に西を目ざして、イスタンブールに降り立つのがわかる。東京・イスタンブールは同緯度に近いことを知った。

ローマ滞在は、ホテル 07:15 発から空港 18:55 発まで

の約11時間半だけ。私は何度かローマに投宿したことがあるので、市内は、バスの窓から眺めて記憶を呼び起こすだけでも充分ありがたい。足を酷使しないように注意しよう。

07:15 ホテル発、朝一番でヴァチカン美術館に入り、比較的ゆとりをもって見学できる。今年は25年ごとの「慈しみの聖年」(Iubilaeum、ガイドさんはジュビーリオと発音していたようだ)にあたり、いつもは閉じているヴァチカン正面扉が、一般人も入場できるように、開かれる、特別な年だ。「イスラム国」(IS)が、次なる破壊としてヴァチカンを狙うと言っているそうで、街中、銃を手に持った兵士、警備員たちが歩きまわっている。おかげで私たち旅行者も安全を守られるわけだ。

この案内も、地域在住の日本人ヴェテラン女性ガイドで、おちついていながら、ドラマティックな表現で、聞かざるをうまく引きつける。今回便利だと思ったのは、何組ものグループが同時に同方向に歩いても、限られたレシーバーだけに聞こえるような波長で、イヤホンからはっきり聞ける。他のグループが間に入りこんでも、遠くからでもちゃんと聞こえるので、私など、自分のペースで進んでは、先にあるベンチや脇の石の上などで小休止しながら聞いていられる。元来耳栓のきらいな私もこんな利点を知る。

機敏なガイドさんのお手柄で、全館を2時間かけ、要所をつないでたっぷり見ることができた。3万人も入るといふサンピエトロ正面広場から、バスに戻って、昼食のレストランへ。その後は、バスの窓からと降りて散策とをくり返したが、私は来たことがあるので、コロッセオ、スペイン階段、トレヴィの泉などは、バスの中に残って足を休めた。

ローマについては、各国の名著や塩野七生のものなども読んでいたが、イタリアで廻った中で最も縁遠く感じる都市だ。たしかに「永遠の都」の風格もあるのだが、建物も堅苦しく、通りもわずらわしく、バロックから近代にかけてのマッチョな嗜好が強い。最後のショッピングチャンスなので、グループの方々は意欲的に買物をしておられたが、私は、だんだんと、10数時間のフライト、翌日午後からの合唱練習などが頭を占めてきて、話も億劫になり、目をつぶっていた。

ローマ・フィウミチーノ空港 18:55 発。往路は、初めてのトルコ航空なので、決して未開ではないが、異文化の雰囲気になじめなかった。帰路は、もう2度目なので、楽にはなったが、つとめて眠ろうとした。成田着後は、すぐにリムジンバスに接続でき、新宿からタクシーで、自宅に20時過ぎに着くことができた。入浴後ただちに居心地よく就寝。ありがたいばかりの1週間となった。さっそく12月26日のコンサートに向かって、新鮮な気持ちで専念するのみ。

(2015年12月22日)